

2024年度

入学試験問題

社 会

40分

1. 受験番号・氏名を解答用紙に書くこと。
2. 受験番号は算用数字で書くこと。(例:123)
3. えんぴつ鉛筆などの筆記用具・消しゴム以外は使わないこと。
4. 用紙を立てて見ないこと。
5. 質問(印刷不明のところだけ)のある場合、鉛筆などを落とした場合、トイレに行きたくなった場合、気持ちが悪くなった場合は、だまって手をあげること。
6. 解答用紙のみ回収します。

私たちは、ふだん財布さいふの中にお金を入れて持ち歩き、さまざまなモノを買うときに紙幣しへいや硬貨こうかを出して支払いしはらいます。現在では、交通系ICカードや、スマートフォンを使って支払うことも増えました。また、特定の地域のみで使うことができる地域通貨や、インターネットの技術を利用したビットコインなどの仮想通貨も知られています。

ここでは、紙幣や硬貨などのお金を「貨幣かへい」とよぶことにします。日本で貨幣がどのように使われてきたのかを考えてみましょう。

1 次の文章を読んで、問に答えなさい。

まだお金がなかった大昔から、人びとは生活に必要なモノを他の地域から手に入れていました。①縄文時代の遺跡いせきの調査をすると、限られた場所でしかとれないモノが、別の地域で数多く発掘はっくつされることがあります。そのことから、この時代の人びとがモノとモノの交換こうかんを通じて、かなり遠くのむらとも交流を持っていたことがわかっています。

飛鳥時代になると、中国にならい日本でも、朝廷ちやうていによって、独自の「銭ぜに」とよばれる金属製の貨幣が造られるようになりました。主な原料の銅が国内で採掘されたことをきっかけに、708年から造られはじめたのが図1の「和同開珎」という青銅で造られた銭です。この銭は②ねん土などで作った型に、とかした銅やスズなどを流しこむ鑄造ちゆうぞうという技術でできています。朝廷は、平城京へいじやうきやうを造るために働いた人びとの賃金や、役人の給料を支払うときに、銭を使うことがありました。奈良時代には、都に設けられた市での商売に銭が使われるようになりました。一方で、朝廷は、地方から都に税を納めるためにやってきた農民たちに、銭を持ち帰らせて、各地に銭を流通させようとしてしました。しかし、モノの取り引きがさかんな都とその周辺以外では、銭を使うことはあまり広がりませんでした。平安時代の後半には、原料不足などから、朝廷が銭を造ることはなくなりました。銭が使われないときのモノの取り引きには、主に米や（A）などの品物が用いられたと考えられています。

図1 和同開珎



にっぽんぎんこうきんゆうけんきゅうじよかへいはくぶつかん 日本銀行金融研究所貨幣博物館 『貨幣博物館 常設展示 目録』(2017年)より作成。

(大きさは実際のものとは異なります。)

問1 下線部①について、このようなモノを使ってできた道具を、次のア～エから1つ選びなさい。

ア ニホンジカの骨でできたつり針

イ クリの木でできたくわ

ウ 鉄でできた剣^{けん}

エ 黒曜石^{こくようせき}でできた矢じり

問2 下線部②^ぞについて、このような鑄造の技術は、弥生時代^{やよい}から用いられていました。弥生時代に鑄造技術を用いて造られ、祭りのときに鳴らして使われたと考えられている青銅でできた祭器を答えなさい。

問3 (A) は、律令^{りつりょう}で定められた税である「庸」^{よう}の支払いにも使われました。その品物を答えなさい。

2 次の文章を読んで、問に答えなさい。

平安時代の終わりごろになると、中国の（ B ）との貿易が、さかんに行われるようになりました。その輸入品のひとつとして、図2のような青銅で造られた中国銭が、大量にもたらされるようになりました。中国銭は、日本だけではなく、東南アジアなどにも広まっていたといわれています。中国銭は、まず貿易港のある博多の町を中心に広まり、やがて平安京などでもモノの取り引きに使われるようになりました。はじめ天皇や多くの貴族たちは、中国銭を受け入れることに消極的でした。一方、①中国との貿易によって利益を得る人びとは、中国銭の輸入を重視し、銭を国内で流通させることにも積極的でした。

その後、鎌倉時代になると、朝廷や幕府も中国銭の使用を認めるようになりました。このころから、それまで地方から米を運んで納められていた年貢が、米の代わりに銭でも納められるようになりました。また、つぼに入っている大量の銭が、土の中にうめられた形で見つかることがあります。さらに、中国銭はとくされて、②鎌倉に造られた大きな仏像の原料となったともいわれています。

室町時代のころには、各地の③農業生産力が高まるとともに、焼き物、紙すきなど、ものづくりの技術も発展しました。全国で特産品が作られて、港から各地へ運ばれて広がりました。東北地方から九州地方にいたるまで、人びとが多く集まる場所には、市が開かれるようになりました。港や市で行われた商売では、銭が広く使われるようになりました。室町幕府の3代将軍足利義満は、中国の（ C ）との国交を開きました。この貿易でもたくさんの中国銭がもたらされました。

図2 中国銭



日本銀行金融研究所貨幣博物館『貨幣博物館 常設展示目録』（2017年）より作成。
（大きさは実際のものとは異なります。）

問1 (B) ・ (C) に入る中国の王朝をそれぞれ答えなさい。

問2 下線部①について、このような勢力の代表が平清盛^{たいらのきよもり}でした。平清盛について述べた文としてまちがっているものを、次のア～エから1つ選びなさい。

- ア 兵庫^{ひょうご}の港を整備した。
- イ 国ごとに守護^{しゅご}、各地に地頭^{じとう}を置いた。
- ウ 厳島神社^{いつくしまじんじや}を守り神とし保護した。
- エ 武士としてはじめて太政大臣^{だいじょうだいじん}となった。

問3 下線部②について、この仏像がある寺院を、次のア～エから1つ選びなさい。

- ア 高德院^{こうとくいん}
- イ 中尊寺^{ちゅうそんじ}
- ウ 東大寺^{とうだいじ}
- エ 平等院^{びやうどういん}

問4 下線部③について、室町時代のころまでに開発された農法や農具について述べた文としてまちがっているものを、次のア～エから1つ選びなさい。

- ア 同じ年にイネとムギを栽培^{さいばい}する二毛作^{にもうさく}が行われた。
- イ 牛や馬にすきを引かせて、農地を耕した。
- ウ 草木を焼いた灰やふん尿^{によう}を肥料として使った。
- エ 備中ぐわ^{びっちゅう}を使って農地を深く耕した。

問5 米などの品物よりも、銭が貨幣^{すげ}として優れている理由を、2の文章から考え、2つあげて説明しなさい。

3 次の文章を読んで、問に答えなさい。

戦国時代になると、中国から日本に輸入される銭の量が減って、モノの取り引きに必要な銭が不足するようになりました。そこで中国銭をまねて国内でも銭が造られましたが、質の悪い銭もありました。①戦国大名のなかには、このような質の悪い銭でも、条件を設けて使用を認めることで、支配地域の商売がとどこおることを防ごうとする者もいました。一方、②金・銀の鉱山開発を進めて独自に貨幣を造る戦国大名もあらわれました。このころは、特に銀山の開発がめざましく、国内で銀を用いた取り引きが行われるとともに、輸出されるようになりました。戦国大名どうしが、鉱山の支配をめぐって、激しく争うこともありました。全国を統一して各地の鉱山を支配した豊臣秀吉は、③天正大判とよばれる金貨を造りました。

問1 下線部①について、このような戦国大名のひとりに織田信長がいます。織田信長について述べた文としてまちがっているものを、次のア～エから1つ選びなさい。

- ア 安土城の城下町で人びとが自由に商売を行うことを認めた。
- イ 商工業で栄えていた堺を直接支配した。
- ウ ポルトガルやスペインとの貿易を行った。
- エ 各地に関所を設けて、通過する品物に税金を課した。

問2 下線部②について述べた次の文章を読んで、(1)・(2)に答えなさい。

戦国時代に開発された銀山のひとつに石見銀山があります。石見銀山では、灰吹法とよばれる技術が朝鮮半島から伝わり、大量の銀が生産されるようになりました。灰吹法は、採掘された鉱石から銀を取り出す方法です。
この技術は、佐渡金山にも伝わり、鉱石から金を取り出すようになったといわれています。

(1) 石見銀山と佐渡金山の場所を、6ページの地図のア～カからそれぞれ選びなさい。

(2) 下線部について、鉱石から金を取り出すようになる前は、金をどのように採取していたか説明しなさい。

問3 下線部③について、この金貨は、日常的なモノの取り引きに使われたものではありませんでした。どのような使われ方をしたと考えられるか、その例を1つあげなさい。

地図



4 次の文章を読んで、問に答えなさい。

江戸時代になると、徳川幕府は、各地の主な鉱山に奉行所などを置いて直接支配をしました。そして、そこから産出された金・銀・銅などを使って、幕府は全国共通の①金貨・銀貨・銭の三貨を流通させました。金貨は主に②江戸を中心に東日本で使われたのに対して、銀貨は③大阪や京都など西日本で使われました。使われる地域にちがいがあったため、幕府は金貨と銀貨を交換する比率を定めました。また、江戸時代には足尾などの銅山開発が進み、産出された銅は、銭の原料として使われました。江戸時代に造られた代表的な銭が、図5の「寛永通宝」です。④寛永通宝は、全国の庶民が日常的に使う貨幣となりました。

これらの三貨以外に、地方を支配していた⑤多くの大名が、「藩札」とよばれる紙幣を発行しました。藩札はそれぞれの藩のなかで使われた紙幣です。この紙幣には⑥木版の技術が使われて、和紙に印刷されていました。藩札のなかには、すかしの技術や特殊な文字を使っているものもありました。図6は、大洲藩（現在の愛媛県）で発行された藩札です。江戸時代には、このような藩札が地域ごとに流通していました。

図3 金貨

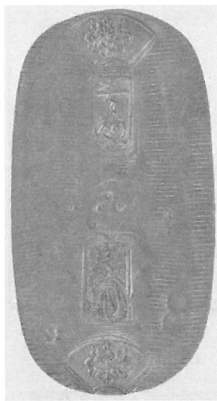


図4 銀貨



図5 寛永通宝



図6 藩札



図はすべて、日本銀行金融研究所貨幣博物館『貨幣博物館 常設展示目録』（2017年）より作成。（大きさは実際のものとは異なります。）

問1 下線部①について、図3と図4は、それぞれ江戸時代に使われた金貨と銀貨です。金貨は「壹両」などと貨幣の価値が刻まれていました。それに対して多くの銀貨は、図4のように形や大きさがまちまちで、貨幣の価値は刻まれていませんでした。銀貨はどのようにして支払われていたのか説明しなさい。

問2 下線部②について、江戸では、参勤交代^{さんきんこうたい}で集まった武士の生活を支えるモノの取り引きが活発になりました。一方で参勤交代によって、江戸以外に東海道沿いの品川^{しながわ}や小田原^{おだわら}、中山道沿いの板橋^{いたばし}や奈良井^{ならい}などの町でも、商売がさかんになりました。これらの町を何というか答えなさい。

問3 下線部③について、江戸時代の大阪について述べた文としてまちがっているものを、次のア～エから1つ選びなさい。

- ア 全国の大名が蔵屋敷^{くらやしき}を置いて、米などを売りさばいた。
- イ 北海道や東北地方の特産物が、日本海まわりの船で運ばれた。
- ウ 高度な織物や焼き物などの手工業が発展した。
- エ 「天下の台所」とよばれ、商人の町として栄えた。

問4 下線部④について、寛永通宝は、城下町の町人や農村の百姓^{ひやくしやう}にも広く使われました。一方、金貨や銀貨は主に武士などの身分の高い人などが使うものでした。江戸時代の町人や百姓の生活について述べた文としてまちがっているものを、次のア～エから1つ選びなさい。

- ア 町人や百姓は、旅行が禁止されたため、有名な寺や神社にお参りすることができなかった。
- イ 町人や百姓は、武士と同じようなぜいたくな着物を着ることをたびたび禁止された。
- ウ 百姓は、酒や茶などを買って飲むことを禁止されることがあった。
- エ 町人は、住む場所を決められ、町を整備するための費用を負担させられた。

問5 下線部⑤について、次のア～エは藩札を発行した藩です。このなかで「親藩^{しんぱん}」とされた藩を1つ選びなさい。

- ア 加賀^{かが}(金沢^{かなざわ})藩 イ 尾張^{おわり}(名古屋^{なごや})藩 ウ 土佐^{とさ}(高知^{こうち})藩 エ 肥前^{ひぜん}(佐賀^{さが})藩

問6 下線部⑥について、江戸時代には、木版の印刷技術を使って、多色刷りの同じ絵が大量に作られました。この絵を何というか答えなさい。

5 次の文章を読んで、問に答えなさい。

明治時代になると、政府は 1871 年に「円」を基本の通貨単位にしました。欧米から新しい技術を学び、紙幣や硬貨が造られるようになり、人びとの間で使われるようになりました。また、①政府は税のしくみも、それまでの米で納める年貢から、土地の価格に応じて貨幣で納めるように変えました。

1882 年に政府によって日本銀行が設立され、「日本銀行券」とよばれる紙幣が発行されました。その後、日清戦争で得た賠償金をもとにして、日本銀行は金との交換を約束した日本銀行券を発行しました。そのころ欧米では、それぞれの国の通貨は金と交換する比率が定められていました。日本もこのとき、金 0.75 グラムを 1 円と決めました。金 1.5 グラムは、2 円となり、アメリカの通貨では、およそ 1 ドルでした。このようにすることで、外国との貿易をスムーズに行うことができるようになりました。その後、1930 年代からは、円と金との交換の約束はなくなり、現在は、円と②ドルなど外国の通貨を交換する比率は、毎日変化するようになっています。

現在、紙幣は、一万円券、五千円券、二千円券、千円券の 4 種類の日本銀行券が発行され、2023 年の終わりでは、185.4 億枚、124.6 兆円が流通しています。③紙幣は現在まで、同じ額面のものでもデザインが変更されてきました。近年では 1984 年、2004 年と 20 年ごとに変更され、2024 年にも新たな紙幣の発行が予定されています。一方、硬貨は、6 種類が政府によって発行されています。1 円硬貨は、(D) でできています。それ以外の 5 種類の硬貨は、ニッケル、亜鉛、スズなどが含まれていますが、すべて銅が主な成分となっています。④銅は貨幣の主な原料として、日本では古くから使われてきました。なかでもスズを含む青銅は、現在も 10 円硬貨の材料となっています。

問 1 下線部①について、このことを何というか答えなさい。

問 2 下線部②について、現在、日本は、ドルを通貨単位とするアメリカとの貿易がさかんですが、日本との貿易額がアメリカよりも多い国を答えなさい。また、その国の通貨単位を答えなさい。

問 3 下線部③について、紙幣のデザインの変更を行わないと、どのような問題がおこると考えられるか説明しなさい。

問 4 (D) に入る金属を答えなさい。

問 5 下線部④について、金属のなかで銅は、貨幣の原料として適していると考えられます。金や鉄と比べて、銅はどのような点で適しているのか、それぞれ説明しなさい。

6 日本で貨幣が広く使われるようになったことについて、これまでの問題文や問をふまえて、次の問に答えなさい。

問1 貨幣が造られるようになってから江戸時代まで、貨幣が使われる場所や地域は、どのように広がっていったか説明しなさい。

問2 貨幣が広く使われるようになるには、朝廷や幕府、政府などが大きな役割を果たしてきました。それは、どのような役割か説明しなさい。

1

問 1

問 2

問 3 A

2

問 1 B

問 2

問 3

問 4

※

問 5

※

3

問 1

問 2 (1) 石見銀山

佐渡金山

(2)

問 3

※

4

問 1

問 2

問 3

問 4

問 5

問 6

※

5

問 1

問 2 国名

通貨単位

問 3

問 4 D

※

問 5 金と比べて

鉄と比べて

※

6

問 1

問 2

※

※

受験番号		氏名		評点	※
------	--	----	--	----	---